

介護老人保健施設しおん

症 例 概 要 利用者氏名：K・N様(女性.90代) 要介護3
利用期間：H29年4月中旬～現在も入所中
既往：H29年アルツハイマー型認知症・慢性心不全

経過：H28.12月より夜間せん妄が顕著、夜間の転倒も増えご家族の介護力不足によりしおんに入所となる。

内 容

Kさんは、息子夫婦と同居してしていたがH28.12月より夜間せん妄が顕著になり、夜間の転倒も増えご家族の介護負担増加に伴い、H29年4月しおん入所されました。

御家族から「なにより食べる事が大好きだった」と言われるほど食べる事が好きで、入所時はユニットでの出前レクや食事の外出を毎回楽しみに過ごされておりました。

しかし、H30年12月頃からアルツハイマー型認知症の進行により自分の気持ちや言葉が出せなくなる事が増加。食べ物に対する認識も低下し始め、大好きだった食事への意欲もなくなり、介助なしでは歩く事も出来なくなってきました。

また、同時期に息子夫婦も病気になり面会の頻度が激減、その為かKさんが不安な表情を浮かべる事が多くなり、スタッフ間で話し合いを重ねました。その中で少しでも寂しい思いをしないように人と触れ合う事や安心して生活できるような関わりの持ち方を検討しました。

1つは1対1で関わる時間を取る事を心がけました。主に足浴をしながらマッサージを行い、横に座って話しかける等のコミュニケーションの時間を取るなどの工夫を重ね、もう1つは歌などの理解しやすい集団レクを開催し参加して頂いた。

他には、笑顔で接する、優しく触れる、まめに声を掛けるなど基本的な事であるが認知症のケアを意識し、なにより「あきらめない介護」の実践を行いました。

久しぶりに面会に見えた息子さんが「母の方が顔色良いですね」と冗談交じりに話して行ったが、Kさんは現在も職員との関わりが増えた事で寂しそうな表情を浮かべる事は少なくなり、何気ない会話での笑顔も多くみられるようになっていきました。

アルツハイマー型認知症は現在も進行しているとみられ、中度からやや高度に差し掛かっている為、何かを劇的に改善する事は難しいが、その日その日少しでもKさんが今後も安心して生活し、楽しいと思えるような瞬間を引き出せるような関わりを実践して行きたい。

また、それらを通じスタッフも成長の場を頂くことでやりがいや他の介護現場でも生かしていきたいと思えます。

今回の症例は、「心を豊かにする」、「尊厳は平等」、「その人らしくキラキラ輝いている」の実践に繋がる症例であり、「あきらめない介護」を通じスタッフも共に成長できた例としてキラキラ介護賞に推薦いたします。